
Paradox--4番目の数字--

四月一日皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Paradox - 4 番目の数字 -

【Nコード】

N0302N

【作者名】

四月一日皐月

【あらすじ】

あの日、あの夜、俺は全てを奪われた。
その日以来、俺は非日常が嫌いになった。
当たり前の日常、当たり前の時間、当たり前の世界……
俺はそれを望んでいた。だがいくら光を望もうと闇は容赦なく俺を引きずり戻す。
まるであの時助けられなかった少女への贖いを待ちわびているように……

『非日常 過去と未来』（前書き）

初めまして、初投稿の四月一日と書いてワタヌキです。

少し更新が遅れるかもしれませんが皆さんどうぞ気軽見ていってください。

さて舞台は現代、主人公は非日常が嫌いな現代っ子らしからぬ優等生です。

基本的にバトルや友情がメインですが時折ラブコメも入れようと思っています。

不束者ですが宜しくお願いします。

『非日常 過去と未来』

その日、俺の瞳に映るものは全て燃えていた。

届くはずだったその手には何も無い。

握れたはずだった手を俺は掴めなかった。

業火という悪魔はかけがえの無いものを全て焼き尽くした。

家も家族も思い出もそして 俺自身もそうなるだろうと思った。
別に生きたいわけではなく、やりたい事があったわけじゃない。

ただ助けたかった。

もう二度と握る事は無いと思ったその手の主を

そんな悪魔の一夜から十一年たった今、俺は何処にもいなかった。
普通に生きて、普通に友達をつくって、でも心は何処にもない。

あの日から全てを失った俺は生きていると言えるだろうか、何処にも

いない俺はいなくなりたいのかもしれない……。

ただ、今でも残っている。もうどんな声だったのかも思い出せないが

たしかに聞いた、あれ以来脳裏に刻まれたあの n i c h t と
言う言葉が……。

「アンタ馬鹿あ？」

いきなり目の前の少女が聞き飽きた台詞を言い始めた。

「少なくとも委員長より成績良い筈なんだけど」

登校早々、何故俺が罵倒されているのか。それ以前に何故この女

は俺にばかり絡んでくる？

「誰が成績の事を言ってるのよ？ そりゃあんたには一回も勝ったことないけど」

じゃあ何の事を言っているんだ、この女は。

「あんた昨日、四組の仲村さんに告白されたでしょ」

「えっ？ ああ、確かにされたな」

「じゃあ、あなたが彼女にした返事を私にもしてみてくれるかしら」
何でこの女にそんなことをしなくてはならないのかと嫌々に考えたがこの女、一度決めたらは他人の意見を聞かない自己中心な性格だった。

「それはここにいるクラス全員に聞かれてしまうがそれでもしろと？」

「私に気にしないわよ」

この女、本当に首を縦に振りやがった。

「じゃあ、聞かせてくれかしら？ 零くん。あなたのことがずっと好きでした。わたしと付き合ってください」

俺は仕方がないと心でため息を付きながら、彼女の全く心のこもっていない棒読みの台詞に答えた。

「ごめん、俺には心に決めた娘がいるんだ」

「そ、そうなんだ、それってもしかして……」

まあ、相変わらずの大根役者っぷりは気にせずに俺は口を開いた。
「うん、昔から好きだったんだ……。ワンニャン動物園のパンダのチーチーが！」

その瞬間、俺の言葉によって教室が凍りついた。

「初めて彼女を見たのはテレビだった、俺は確信した。この娘こそ運命の娘なんだと。だから君の気持ちは嬉しいよ。でも俺には運命の娘がいるから」

俺は彼女の前で熱演した。朝っぱらから盛り上がりすぎた気はするが言われたとおりにしたからコレで彼女も満足だろう。

委員長の様子を伺うと俺の顔を汚いものを見るような目つきで見
ていた。

「昨日さ、その子から相談受けたんだよ。零君が委員長の事、好き
かもしれないけど告白したって。あたし的にはさ、べっ、別にどう
でもよかったんだけどね」

完璧に演じたはずなのに彼女の眼がっぴり上がって来ている。

ああ、昨日あの娘が言いかけた人って委員長の事だったんだ。

俺は心の中でそう思った。

「人の趣味にどうこう言うつもりは無いよ。ただね、どうしても許
せないの……」

彼女は大きく息を吸い込むとまるで何かが破裂したように叫びな
がら、腰を回して俺の懐目掛けて後ろ蹴りをかましてきた。

「このあたしがパンダなんかに負けたことが一番腹が立つのよ！」

「ごぼっ！」

あまりにも唐突過ぎることで俺は何が起きたか分からず、目線が
上を向き、ドアに投げつけられるように叩き付けられた。

あまりの迫力に横で見ていた男子生徒は腰を抜かすほど気圧され
て椅子から倒れ、女子生徒は彼女に怖気付いてしまった。

「はあ、はあ、わかった次にあたしを侮辱したら屋上から吊るすわ
よ」

彼女はそう言うときさっさと自分の席へかえっていった。

俺はというと若干意識がふっ飛んでいて、還ってきたのは現文の
北村が教室に入って来た時だった。

昼休み、俺たちはいつもどおり校舎の屋上で昼食をとることにし
た。

「しかし、お前。委員長に喧嘩売るなんて命知らずにも程がある
な」

ツレの一人が俺に感心だか哀れみの目で俺に振ってきた。

「別に喧嘩売ってたわけじゃねーよ」

俺は元氣のかけらも入っていない抜けた返事を返す。

俺こと霜月零は何処にでもいる普通の高校生であろうとする。

容姿は自分で言うのも何だが人並み以上に整っているだろうと確信していた。髪は少々目元まであり、見えにくいが切る予定はない。クラスでの立ち位置は優等生で成績も常に上位だが別にこれと言った興味もなく、基本的に無気力。

しかしそれでも必要な事だけはしっかりとやり通すから結局、成績も料理も自分に必要な事をやっていたら結果が後から普通についてきたただけだ。

普通の高校生と違うのは天涯孤独と言うところだけだろう。

俺の家族は十一年前、火事で巻き込まれて不幸にも亡くなった。

あの火事以来、非日常が嫌いになった。健全な高校生なら誰でも憧れるロボットと異世界なんて何が楽しいか全く分からない。そんなものは結局大事な物を失うだけなのだ。

だから俺はありのままの日常が大好きだ。これからも普通に好きな人ができ、結婚して子供を儲け、子供たちの為にずっと定年まで働く……それが俺のこれからの生き方だと思う。

「でも委員長と張りえるなんてお前だけだぜ。まあ委員長からしたモテ男のお前のことは良くは思っていないんだろうけどな。実際俺もお前のモテ振りにはムカつく」

つか、ただの逆恨みだろ。お前の言い分は。

「あつ、そっぴやさ。例の件どうだった」

「ん？ 例の件って何だ？」

俺は連れに惚けるようにして聞いてみる。

「ああ、この前零くんいなかったけ。実はまた美影学園が生徒募集しているらしいよ」

地味で大人しげの笑顔百点満点の大神君が説明してくれた。

「美影学園って、あの美影学園？」

美影学園と言えば県内でもトップを誇る有数の進学校で入学費、授業料は無料でおまけに寮も無償で使え、全国で入学希望者数がトップなのだ。おまけに設備も万全で約三千人が学べるほどの広さもある。しかも温水プールや野球部専用のドームも設備しているらしい。

「そんな超有名校がうちみたいな貧乏学校の生徒欲しいみたいだよ」「じゃあ、もしかしてお前ら……」

「……もちろん、先生に売り込んできました」

はあ、こいつら馬鹿だろ。そう思いながら心の中で俺はその馬鹿さ加減に感心した。

「でもあそこって、何をしてたら入学させてくれるか分かんねーんだろ？」

「まあ、そうなんだよね。実際、隣の高校からも三人くらい入学してきたらしいけど一人は頭がいいガリ勉でもう一人は文科系で行けたらしいけど最後の一人は別に頭良い訳じゃないのに受かったらしいよ」

「へえー」

「絶対そいつ裏金とか使ってるぜ」

「そうだよな」

実はその散々に言われたそいつは俺の友達だったりするんわけだが、こいつらが知ったらどうなるか。まあ、恐らく怒涛の質問攻めだろうな。

さすがに、これ以上は面倒ごとを起こしたくないので知らないフリをした。

キンコーンカーンコーン。

昼休みと言う短い休憩に終わり告げるチャイムが校舎に鳴り響く。「やべっ、次理科室だっけ。実験器具用意しなとかなきやあの吉田が五月蠅いぜ」

俺たちはゴミを袋に詰めて、教材を取りに行く為に急いで教室へ

戻った。

放課後。

俺は家に帰る為に正門を抜けて、来た道を帰っていく。
気だるそうに周りを見ても、朝とは違った通学路には変化もなく
人が流れていくばかりだ。

良かった。俺はこの日常にいることを静かに実感した。もう関わりたくない。

あんな非日常的なことは。

「さあ、かえってカレーでも作るか」

そう意気込み、スーパーに入ろうとした瞬間。

ボンッ！

背後から鼓膜を破裂させるような爆発音と背中を触るように熱が
風となって伝わってきた。

振り返ると真後ろにあったビルから激しい炎が見える。

何だ何だと野次馬がビル周辺へ集まって、日常が流れていた場合は
ガラリと変わった。

俺は胸が張り裂けそうな気分でビルの火災に目を向けた。

たった今、俺は平凡な日常を確認したばかりなのに 予期せぬ
所で非日常は牙を向いたのだ。

だから、嫌なんだ。

恐らくあの爆発なら誰一人生き残っているはずがない。

俺はしばらくその火を見つめていたが気分が悪いのでその場から
退散したその時。

「助けて、お母さああん！」

俺はその助けの声に瞬時に振り向き、ビルの三階を見た。

まだ生き残っている子供がいたのだ。周囲から更にざわめきが大きくなっていく。

俺と同じ様にあの爆発では人は助からないと思っていたのだろうがあの子供は確かに生きていた。そして助けを求める声を上げていた。

「お前が助けに行けよ！」

「あの火の中じゃいずれ死んじやうわよ！」

「おい！ 消防車はまだかよ！」

ざわめいていた野次馬はいつの間にか、喧騒で溢れかえって誰も動かないでいた。

俺はそんな彼らを見て苛立ちを覚える。

皆日常から抜け出したいと思っっているのにいざ非日常が襲ってくるとすぐこれだ。

「助けて！ 熱いよ！ お兄ちゃん！」

その言葉を聞いた瞬間、何故かはわからないがその場を疾走していった。

俺は非日常が嫌いだ。もしこんな場に立ち会ったとしても平然な顔をして、立ちさうとずっと思っていた。

でも俺は走っている。

考えるより先に俺の足は燃え盛るビルに向いて走っていた。

周りからは止めておけなどの諦めを臭わせる言葉が飛び交うが俺はそんな事を聞かずに蛮勇だけでビルへと赴く。

その子供にあの時助ける事ができなかった妹を被せて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0302n/>

Paradox--4番目の数字--

2010年10月8日14時45分発行